

日本鉄鋼協会記事

研究委員会

第6回委員会 開催日：1月17日。出席者：作井会長、渡辺、不破両副会長、田中委員長、ほか19名。

1. 昭和47年3月より共同研究を続けている基共研凝固部会の活動状況について、郡司部会長より約1時間半にわたって講演があつた。

2. 鉄鋼工学セミナーの件について、活発な討論がなされ、セミナーの目的、内容については、ほぼ了解されたので、次回の研究委員会までに具体的な方針を検討委員会で検討し早終案を提出してもらうことで意見が一致した。

3. ほかに鉄鋼協会活動の将来計画などを話しあつた。次回は昭和50年2月28日の予定である。

第6回鉄鋼工学セミナー検討委員会 開催日：1月20日。出席者：加藤主査、ほか11名。

研究委員会で本委員会の主旨が充分理解され、内容的にも大略は了承されたので、鉄鋼工学セミナーを一度やるということで討論を行なつた。

講座内容については、まず講座数として、製錬関係を製鉄と製鋼に、分けた方がよいという意見が多く出、材料部門と合わせて3講座ということで話を進めた。また講義内容、講師の件などについても概略を検討した。

今後は各部門に分かれて、担当実行委員による最終案の作成を行なうことにした。

次回の予定は、昭和50年2月17日に行なうことにした。

編集委員会

第12回和文会誌分科会 開催日：2月7日。出席者：松下主査、ほか14名。

1. 「鉄と鋼」第61年第8号（6月号）の掲載論文を決定した。

2. 「鉄と鋼」特集号として「高炉の炉内状況」をテーマに51年3月発行することを決定した。

3. 環境問題特集号に関する共研と鉄連との打ち合わせ指導が報告された。

欧文会誌分科会 開催日：2月18日。出席者：橋口主査、ほか7名。

1. 5件の論文について審査報告がなされた。

2. 「鉄と鋼」61年7号のアブストラクトから2件の研究論文と1件のSpecial Lectureについて投稿を勧誘することが決定した。

共同研究会

原子力部会

第37回第4小委員会 開催日：2月3日。出席者：一色委員長、ほか13名。

文献研究発表

1. BNES Paper No 40「VHTR 用金属および合金」by OECD Dragon プロジェクト ハドル氏

発表者：神鋼中研 小織氏

2. ASME Paper 74-WA/HT-1「Fort St. Vrain 炉 PCRV 内断熱構造の開発プログラム」by G. A. G. Jones 他

発表者：IHI 技研 仲田氏

以上2件の論文についての研究発表が行なわれ、活発な討議が行なわれた。

第12回第5小委員会 開催日：1月28日。出席者：笛木委員長、ほか12名。

1. 笛木和雄新委員長の挨拶

2. 今後の第5小委の進め方について出席者間で自由討議がおこなわれた。席上余田幹事から最近ヨーロッパでとりあげられている問題は、

(イ) 石炭のガス化、液化

(ロ) 水の熱化学的分解

の2点であることが報告された。この課題はわが国では大プロ・サンシャイン計画に含まれているが、このサンシャイン計画と5小委の関係をどのようにとらえていくかが大きな問題点となり

・5小委は大プロにとらわれず新しい方法を考えていく必要がある。

・サンシャイン計画から情報を得て進めるとなると5小委の意義は薄れる。

など種々の意見が出された。しかし結論をみるにはいたらず・事務局と幹事で整理して次回にもう一度進め方の案を検討することになっている。

標準化委員会

ISO 鉄鋼部会

第7回 SC15 分科会 開催日：1月17日。出席者：青木主査、ほか8名。

1) 国際会議報告

49年11月26～28日開催の第3回 ISO/TC17 SC15 の出席報告が行なわれた。寸法、形状許容差、試験片の採取位置、試験数など日本提案がほとんど採り入れられ、また重量許容差削除提案も受け入れられた。

ゲージの標準化はWGを設けて検討することとなり、日本も参画することになった。

2) ゲージの標準化

日本で使用中のゲージを提案することになり、2月5～6日のWGに代表を派遣することになった。

データシート部会

第3回耐候性に関する調査分科会 開催日：1月20日。出席者：鈴木主査、ほか6名。

1. 主査より、前回データシート部会（昨49年12月

20 日開催)の報告がなされた。同報告で、鋼の耐候性に関するまとめ案が部会において本分科会決定通りに承認されたこと、および、本分科会の志向する「まとめ報告書」は従来のデータシートと若干スタイルが異なる感があるがユーザー側から見ると非常に便利であろうとの意見の多かつたこと、が示された。

2. 本分科会の委員の構成などについては、必要な時点で塗料工業会・鋼構造協会などに接触して協力を要請していこうとの意見が多かつた。

3. 本分科会でまとめる報告書の内容についての論議があり、マニュアル的色彩の濃厚なものとなろうとのことで、類似資料との関係などをも配慮のうえ、次回の分科会において各所でにつめた案を持ち寄つて再検討することとなつた。

第 18 回構造用鋼の機械的性質分科会 開催日: 1 月 30 日。出席者: 山本主査, ほか 8 名。

1. これまで主査をつとめられた八巻雄三氏が他部門に転出されたので、山本俊郎氏が新たに主査に就任され、その挨拶があつた。

2. データシートシリーズ第 3 集原案のチェックについて、書面にて表明された田中部会長の御意見ならびに御指摘に関する部分を中心に原案の点検・推敲を行なつた。なお、データの詳細に関しては、参加 8 社で各 2 鋼種を分担して再チェックを実施することを確認した。また、一部の鋼種については再試験を実施し、データを採りなおすことになつた。

3. 本分科会で今後取り上げるべきテーマについて検討し、数件の提案があつたが討議の結果、次の 2 件に絞られ、次回分科会で具体化案を集約することとした。

(a) 低温性質 (遷移温度, etc.)

(b) 硬さの基準値 (熱処理などの影響 etc.)

材料研究委員会

第 13 回委員会 開催日: 2 月 6 日。出席者: 長島委員長, ほか 13 名。

過去 3 年間行なつてきた「焼もどし脆性に関する研究」のための委員会は今回が最終であり、従来の研究結果に対する若干の補足と、研究結果のまとめなどが審議された。議事概要は下記のとおり。

1. 研究報告書は 5 月末発行の予定とする。

2. 次期委員会は、「焼入性の評価方法」を研究テーマとするが、委員長には、現幹事長の天明氏 (鋼管) にお願いする。

3. 各社からの提出資料に基づき、48・49 年度の研究結果のとりまとめを行なつた。

4. 今春の講演大会にて行なう部会報告の原稿について審議し、まとめを行なつた。

5. 次期委員会の第 1 回は 4 月に開催することとした。

製鉄技術調査委員会

第 3 回委員会 開催日: 1 月 31 日。出席者: 小林委員長, ほか 19 名。

懸案項目のまとめを担当各社より発表してもらい、小林委員長がまとめ、第 3 ワーキンググループに報告し、第 3 ワーキンググループの活動状況をみて、次のステップを踏むこととした。

鉄鋼基礎共同研究会

強度と靱性部会

第 27 回部会 開催日: 1 月 27 日。出席者: 荒木部会長, ほか 9 名。

1. 部会報告書印刷及び別刷の件

2. シンポジウムのプログラムおよび座長の件

3. シンポジウムにおけるパネル討論会の運営案審議

なお、本部会は 2 月 26 日に開催予定のシンポジウムを持つて終了することとなつている。

特殊精錬部会

第 2 回第 1 分科会 開催日: 1 月 30 日。出席者: 井上主査, ほか 21 名。

研究発表を行なつた。次の 3 件である。

① 水素の数式モデルの応用に関する一検討 (鋼管枝研)

② スラグ中の水蒸気吸収 (東北大)

③ 新設直流 ESR 炉の実験 (名大)

今後のすすめ方として、①の発表に関して他にもデータがあれば提出していただき数式モデルの妥当性をチェックしたいということおよび、 O_2 , S, H_2 , 介在物, ESR における電気的特性について研究することとした。

鉄鋼科学技術史委員会

第 7 回委員会 開催日: 2 月 4 日。出席者: 館委員長, ほか 9 名。

製鋼, 材料, 教育の各ワーキング・グループの活動報告があつた。

(1) 製鋼 W・G

現在まで、7 回の会合を行なっている。今回は青山主査より LD 導入に際しての酸素と耐火物の問題点を中心に説明があつた。

(2) 製鋼 W・G

第 4 回まで活動を行なっている。

材料の高張力鋼を例にした場合、歴史は使用技術とのからみが重要な因子となると思われ、その 1 つの approach の方法として事故の歴史なども溶接性の評価とからめて問題を取り上げること検討していきたい旨の荒木主査より報告があつた。

(3) 教育 W・G

現在、先輩の体験談聴取を進めるよう検討中である旨を原主査より説明があつた。

新入会員氏名

(昭和49年9月1日～9月30日)

正 会 員
竹内 力 日本鋼管(株)
福山研究所
黒河 昭夫 “ “
碓井 務 “ “
平林 清照 “ “
田村 学 “ 技術研究所
近藤 隆明 “ “
田中 恵 “ “
小林 尚新日鉄(株)基礎研究所
渡辺 紘輔 “ 大分製鉄所
今井 宏 “ 製品技術研究所
勝谷 良碩 “ 君津製鉄所
渡辺 誠一 “ “
武井 康示 “ “
中島 明一 “ 室蘭製鉄所
山下 法政 “ “
的場 祥行 佐友金属工業(株)中研
時政 勝行 “ “
中井 日出勝 日本電工(株)北陸工場
石井 一夫 “ “
中路 孝 日本冶金(株)
川崎製造所
岡登 信義 “ “
莊司 孝志 昭和電工(株)
金属研究所
吉村 亮一 “ 金属事業部
岡島 只幸 日本精線(株)枚方工場
小杉山春治 “ “
穴久保淳一 川鉄鋼管(株)検査課
長谷川誠治 “ 第一鋼管課

木村 和成 東京芝浦電気(株)
タービン開発部
服部 和治 “ 電機技術研究所
山口 景 山陽特殊鋼(株)
古沢 貞良 (株)神戸製鋼所
秋吉 哲男 川崎製鉄(株)
千葉製鉄所
鬼沢 俊夫 富士通(株)
井上 哲雄 鈴鹿工業高専金属工学
科
浅井 輝雄 中越ワウケシャ(株)
サービス課
下川 正樹 佐藤技術研究所研究員
輪竹 一雄 日本特殊鋼(株)
九州営業所
岩佐 良秋 プレス工業(株)技術室
源馬 国恭 東海大工金属材料講師
檜垣 哲治 (株)日本製鋼所
広島製作所
清水 聖 現ブラジル留学
枝松 邦明 関東特殊鋼(株)
井上 義幸 光洋精工(株)
中央研究所
羽生 誠之 三菱重工(株)
神戸造船所
奈良 武士 石川島播磨重工(株)
長尾 幸男 三井造船(株)
玉野研究所
永井 徳一 城東製鋼(株)
水谷 正彦 中央電気工業(株)
鹿島工場

田中 志賢 (株)堀切パネ製作所
矢幡 茂雄 高周波熱錬(株)
開発技術部
田中 康弘 神鋼鋼線工業(株)
富永 基夫 関東特殊鋼鑄造工場
渡辺 豊文 日本鋼管(株)
技術研究所
木村 征太郎 トピー工業(株)
技術研究所
速水 弘明 ユーナイテッドステー
ツコンサルタンツイン
コーポレイテッド
富永 昌武 川崎重工業(株)研究員
田口 信之 日本電工(株)北陸工場
多田 清次 (株)北海鉄工所
Arturo Gonzalez 早稲田大理工
金属工学
Andrew Luscombe フォセコジャ
パンリミテッド

学 生 会 員

小野寺幹男 職業訓練大学校
金属材料
古柴 豊 九州工業大工院金属科
妹尾 義和 東京大院工金属工学科
佐々木 康 “ “
吉葉 正行 東京都立大院工学研究
科

外 国 会 員

Gunnar Thaning Sweden
Pehr-Adrian Ilmone Sweden
Tan Tock Kwee Malaysia

(昭和49年10月1日～10月31日)

正 会 員
石上 修 (株)神戸製鋼所
井上 豪 三菱樹脂
影山 英明 新日本製鉄(株)
基礎研究所
本間 博行 “ 大分製鉄所
小河 卓 日本鋼管(株)
技術研究所
坂本 洋志 帝国産業(株)津田工場
須藤 志仁 日本ステンレス(株)
直江津製造所
塚本 雅彰 川崎製鉄(株)千葉工場
手嶋 鎮博 日新製鋼(株)
周南製鋼所

鍋島 秀雄 日本ステンレス(株)
直江津製造所
安井 誠一 矢作製鉄(株)
企画研究室
大崎 慶治 日新製鋼(株)
周南製鋼所
Jesus Huaynate Alya Side Peru
学 生 会 員
岩崎 吉二 鉄鋼短期大学
西堂 克己 “
沢田 峰男 “
島田 敏明 “
菅原 昭男 “
鈴木 義人 “

佐谷 次郎 鉄鋼短期大学
柴田 勝 “
永岡真寿夫 “
中原 雄二 “
村上 政博 “
村河 幸夫 “
森安 良樹 “
板谷 龍二 富山大工学部
斉藤 宏通 東北大工金属系学科
宮崎 秀夫 姫路工大院金属材料

外 国 会 員

Centro de Informacion Mexico
Metalurgica

(昭和49年11月1日～11月30日)

正 会 員
高橋 静男 中越ワウケシャ(株)
市村 竹次 吾姫精機鋼業(株)
大内 千秋 日本鋼管(株)技研
大橋 康史 “ 京浜製鉄所

鬼丸 貞幸 ダイハツ工業(株)
佐川 俊二 富士電機製造(株)
西沢 良雄 日本金属(株)板橋工場
葉石 敬之 日本鑄鍛鋼
平石 久志 久保田鉄工(株)

福島 佳春 住友金属工業(株)
和歌山製鉄所
福島 秀一 “ 試験課
増尾 久 新日鉄(株)室蘭製鉄所
高崎 誠 “ 名古屋製鉄所